

まちの風景を使いこなす

E-DESIGN
忽那裕樹

住まい訪れる人が、場所を楽しく使いこなしている状況。

まちの魅力は、その積み重ねから育まれてくるのだと思います。

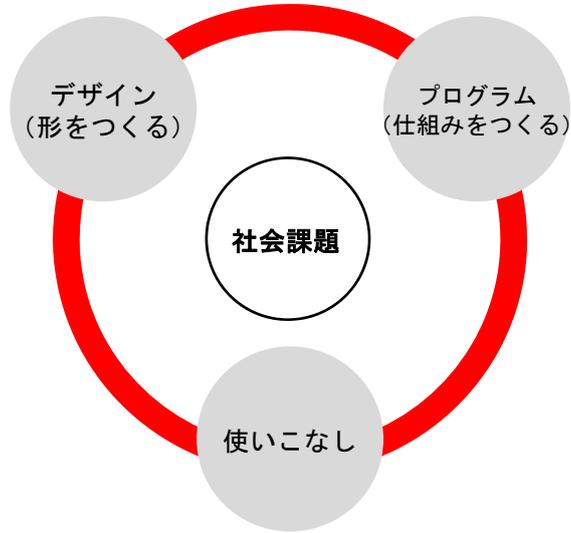
楽しく使いこなす姿は、それぞれのライフスタイルを豊かにする活動ができ、つなげていける場に生まれてきます。

身近な屋外環境やまちの広場や公園などのオープンスペースは、それらを支える大切な場所です。

活動のベースとなる「環境の器」をデザイン

活動を支える仕組みづくり

自らのスタイルで、大切な人との時間を豊かにする使いこなし



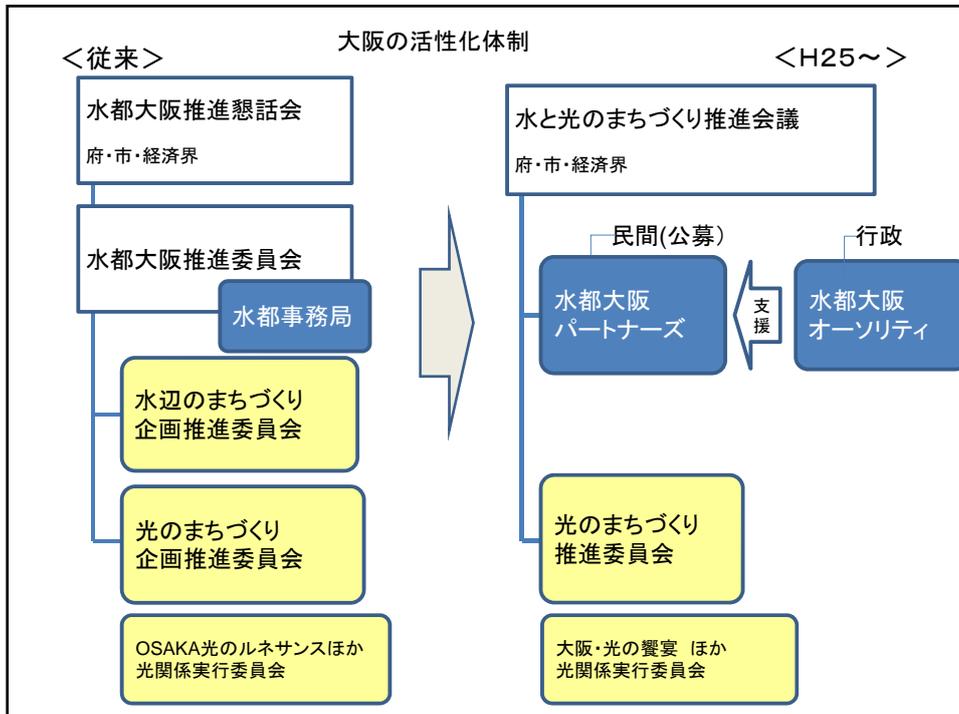
水都大阪フェス
水辺のまちあそび

フェスの3つのコンセプト

①都市の水辺の魅力を使いこなす

②まちで、楽しみを分かち合う

③大阪に誇りと愛着をもつ





大阪のチャレンジを結集したフェスティバル
 ～ みんなの笑顔を大阪の都市再生のパワーに！ ～



水都・金チヌ(淀川テクニック)



水都・ラバーダック(フロレンタイン・ホフマン)



水都・ラッキードラゴン(ヤノベケンジ)



永井英男「B-PROJECT へそで投げろ」

水都大阪
フェス2011

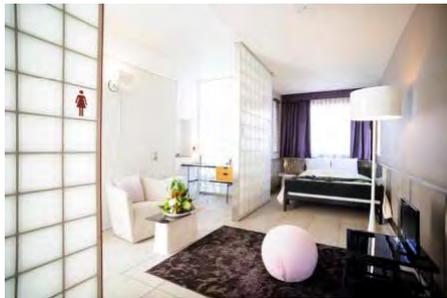
水都大阪フェス2011



たのしむ



新大阪コンベンションセンター



伊弉諾Nipponシリーズ“花子”

現在は、北浜テラスは常設化し、8店舗に拡大



「OU」



「MOTO COFFEE」



「十六夜」



「真琴」



「北浜ルンパ」



「Buon Grande」

めぐる

大阪水辺バル
2012

舟で、はしごする？
大阪のうまいを



水都大阪フェス2012がめざす5つの方向性

①
多様な主体の参画

②
水辺とまちの
回遊性の向上

③
イベントミックス

④
水都コンテンツの
ブランディング

⑤
ステークホルダー
の拡充

水都大阪 フェス2013



AQUA
METROPOLIS
OSAKA 2013
FESTIVAL

中之島公園
10/11(金) - 14(祝)
(4日間)

中之島GATE
10/11(金) - 27(日)
(17日間。うち5日間台風等で中止)

10月	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27
中之島公園	コア期間																
中之島GATE	コア期間				中止				中止			中止	中止	中止			



水都大阪フェス2013

中之島公園 インターナショナル・パークリゾート

国際交流をテーマにした世界からの集客を実現する公園

中之島公園会場 4日間で11万人が来場。



水都大阪フェス2013

水辺ピクニック

思い思いに公園を楽しむ風景が実現。
フリーマーケットも開催。





水都大阪フェス2013

ワークショップ

子ども達が楽しめるプログラム。
万華鏡作り、手漉き和紙、囲碁、
将棋、など。公募プログラム19件



水都大阪フェス2013

世界のバルミュージアム

- 世界の水都の食とエンターテイメント
- 店舗は、日本商環境デザイン協会の全面協力





水都大阪フェス2013

初

グリーンマーケット 市役所南側(道路空間)で、マーケット開催



水都大阪フェス2013

- ・約400の出展者が参画(事業者・市民団体)
- ・市民団体の発表の場として定着。



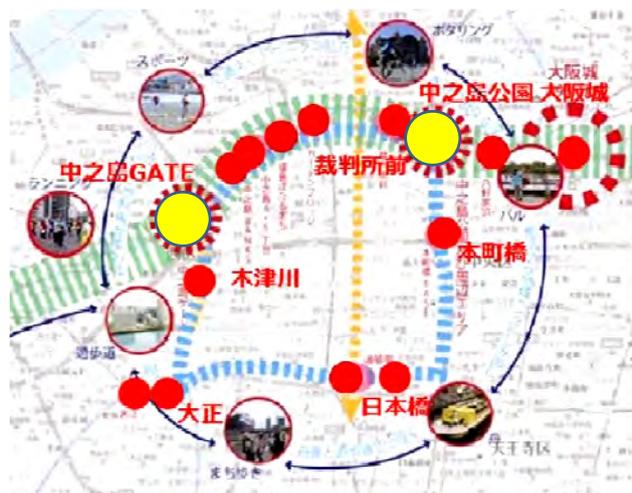


水都大阪フェス2013

サポーターや公募プログラムの担い手も拡大。
サポーター103名。養成講座11回。



活動エリアイメージ 水の回廊



- 2大拠点
中之島公園
中之島GATE
- 連携拠点
13か所

中之島GATE インナーベイ・マーケットリゾート

常設の場外市場型飲食施設を備えた、海と川を結ぶ都心周縁のリゾート

中央卸売市場対岸で実施



Restaurant

レストラン

場外市場型レストラン

Market Resort

中央卸売市場の新鮮な食材を使ったレストラン街が中之島GATEに登場!
大阪のクオリティ高いレストランが店出し、自慢の酒や限定メニューをふるまいます。水辺空間に光の演出も。

CARNIVAL KITCHEN



カレーライス、
サンドウィッチなど

ピストロ・シャンパーニュ



シャンパーニュ、玉ねぎキッシュ、
ケサティージャ、フィアグラ焼きそばなど

PIER 34 NORTH Nakanoshima Gate Cafe Diner



ハンバーガー、BBQなど

島之内フジマル醸造所 中之島GATE出張所



フジマル醸造所
島之内

緑生ワイン、シヨウクルート、
リエット、野良のチリソースなど

大船水産



天下の自産
大船水産
街のみせ

本マグロ解体、鮮魚販売、
干物、乾物販売、寿司など

mitte



オードブル盛合せ、
フロンセック、ガレット、
カレー、スイーツ、
フルーツピネガーなど

CRAFT BEER HOUSE molto!!



国産地ビール(4種)、オリーブ、
チーズ、豚バラなど

クオリティの高い大阪の7店舗を誘致。
鮮魚・寿司、フレンチ、洋食 など



期間中 約5万人が来場



「水都スタイルを」 世界へ



「水都大阪2015」コンセプト

水辺のまち大阪で一日わくわく。
—水辺に繰り出す「水都スタイル」の提案—

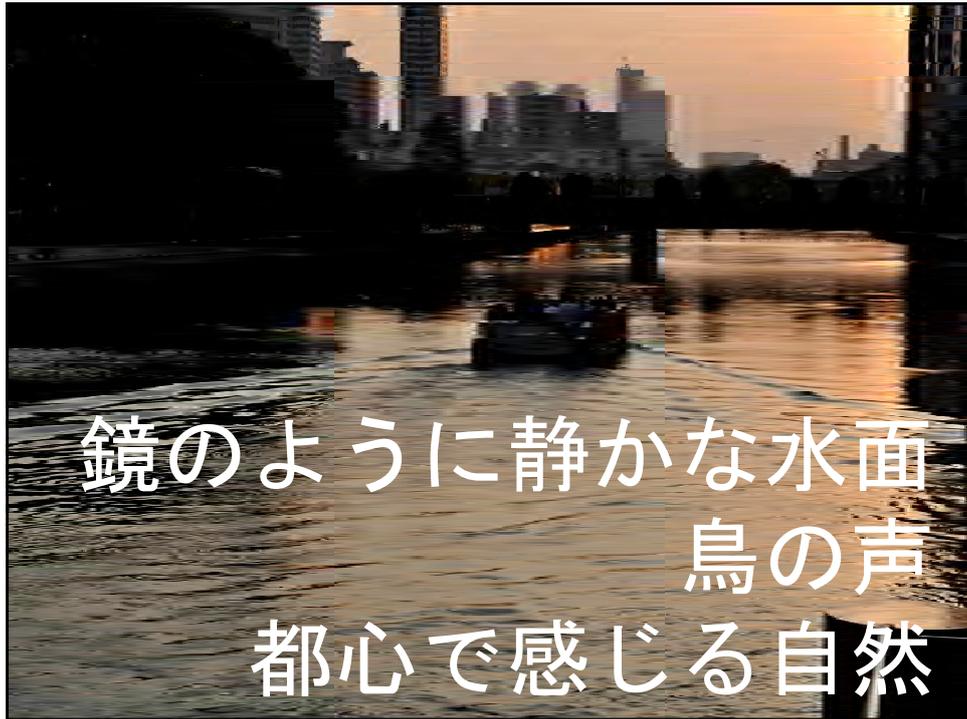
水の都大阪の朝・昼・夜を楽しみ尽くす生活
「水都スタイル」を提案し、国内外からの集客を
図る。

水辺のまち大阪で一日わくわく
2015年
「水都スタイル」

の提案



ご来光



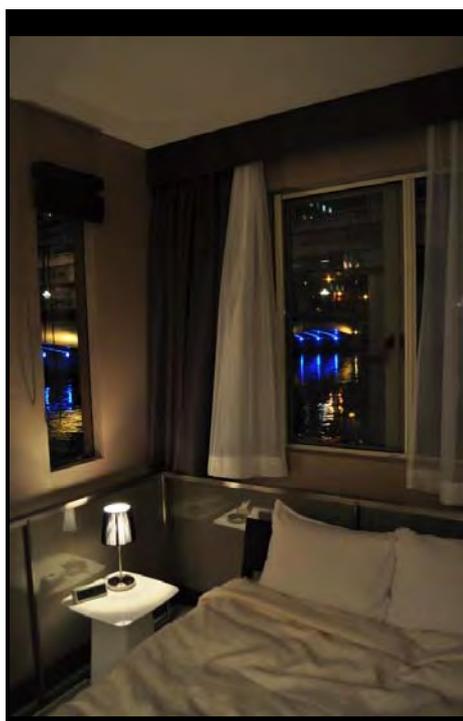


ウォータースポーツ 中之島GATE



水都大阪の夕暮れ





部屋から
楽しむ
中之島の
美しい夜景



夜景を楽しむクルーズ

2015年 水都大阪 文化芸術祭

中之島公園 インターナショナル・パークリゾート

■ 2015年 中之島公園の状況

■ 市役所南側

- 国際的なマルシェ
- 手作り市
- チャレンジショップ

■ パラ園

- ウェディング
- ファッションショー
- 企業持ち込み企画 (プロダム)

■ 芝生広場

- ケータリングカー (車LED)
- ピクニック
- ヨガの開催

■ 中央公会堂前河川沿い

- メガアート
- ピカデニー (ホテル日航東京)
- コミュニティサイクル 0010ECO

■ 中央公会堂前

- 市民団体の発表
- パフォーマー
- ステージイベント

■ 阪神高速下

- 2016のランドマークとなるシンボルを披露 (水都大阪 大文化祭)
- 屋外映画祭 (巨大スクリーン)

■ 芝生広場河川沿い

- フローティングホテル (アマゾン川 The RV Ark 号)
- フローティングレストラン (LEXUS DINING OUT)
- 仮設ショップの運営 (コンテナ)

中之島公園 インターナショナル・パークリゾート

国際交流をテーマにした世界からの集客を実現する公園

■2015年 日常の賑わいづくり 芝生広場



水辺を楽しむ



中之島公園 インターナショナル・パークリゾート

国際交流をテーマにした世界からの集客を実現する公園

■2015年 水都大阪 文化芸術祭 市役所南側



中之島公園 インターナショナル・パークリゾート

国際交流をテーマにした世界からの集客を実現する公園

■2015年 水都大阪 文化芸術祭 市役所南側



世界の船結集

中之島公園 インターナショナル・パークリゾート

国際交流をテーマにした世界からの集客を実現する公園

■2015年 水都大阪 文化芸術祭 芝生広場



中之島GATE インナーベイ・マーケットリゾート

常設の場外市場型飲食施設を備えた、海と川を結ぶ都心周縁のリゾート



場外市場型レストラン

中之島GATE インナーベイ・マーケットリゾート

常設の場外市場型飲食施設を備えた、海と川を結ぶ都心周縁のリゾート



一時係留スペース
中之島GATE

社会実験

■食と光のエンターテイメント



社会実験

■新しい水辺のライフスタイル



社会実験

■都心の水上オアシス



水辺B I Dの
実現へ

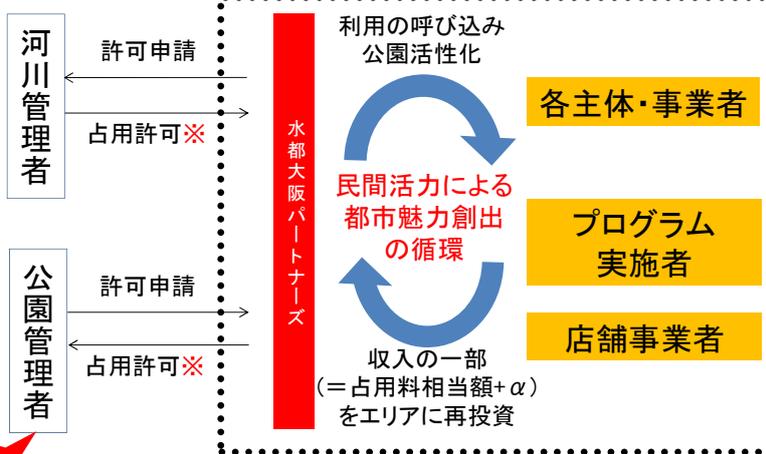
水都大阪パートナーズによるエリアマネジメント

中之島公園周辺エリアにおける4つの準則特区の活用
 + 舟運事業者との連携



水都大阪パートナーズによるエリアマネジメント

■ステージ1の事業スキーム案 (公共施設管理者等と協議・制度設計が必要)



道路も

※大阪版BID制度・指定管理者制度等が適用できるまでの間、エリアマネジメント活動を支援するため、占用料の減免などの方策について、各管理者と調整。

水都大阪パートナーズは「民間投資循環の水辺BID」をつくります。

1 パークマネジメントや包括的占有
 国際交流・ビジネス創出・食・マーケットの恒常化
 民間ニーズ把握・水辺BIDの仕組み構築
 (中之島公園+周辺道路・水辺など、中之島ゲート(未利用国有地・河川敷地))

2 公共投資と連動し民間投資・開発誘導
 ビジネス展開・新たな水辺の賑わい創造
 (オーソリティとの役割分担・民間事業参画)

3 集客産業&プロモーション循環モデル
 水都大阪の楽しみ方インフォメーション
 (船着場統括管理&楽しみ方発信)

4 担い手&ネットワークづくり
 ホスピタリティを持つ応援団の育成



2015年



市役所南側 (道路+公園)



芝生広場



大阪府大阪市 推進体制

資料1-3

推進体制 (H26年度~)		備考
決定機関	<p>水と光のまちづくり推進会議</p> <p>構成員 大阪府知事、大阪市長、大阪商工会議所会理 関西経済連合会会長、関西経済同友会代表幹事 大阪府都市魅力戦略推進会議会長</p> <p>→ 推進統括部署</p> <p>アドバイザーボード(専門助言機関)</p> <p>企業家、学識経験者、ジャーナリスト</p>	<ul style="list-style-type: none"> ◇水と光のまちづくりに関する取り組みの基本方針の策定 ◇水都大阪パートナーズの運営者の選定 ◇水都大阪パートナーズの事業の支援、事業評価
執行機関	<p>水都大阪パートナーズ</p> <p>国内外の豊富なビジネス経験を有する方や、水都大阪2009以降、常に水都大阪の取り組みに携わっている方など、多岐にわたるノウハウ・経験を有する新鋭な運営メンバーで構成</p> <p>【事業内容】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・新たなシンボル空間創造、エリアマネジメントの推進 (BID手法の活用等) ・水辺の賑わいづくり(水都フェス等)・社会実験の推進 ・水と光の首都大阪のブランドイメージ発信 <p>※水都大阪パートナーズ、H25公募により選定した民間組織 複数年(4年)の運営を前提としているが、実績評価は毎年実施する。</p> <p>府・市・経済界が一体となり 取り組みを支援</p>	<ul style="list-style-type: none"> ◇民主導の水都事業推進組織 ◇プロ人材が運営に参画 ◇収益事業も積極的に展開(自ら稼ぐ) ◇評価システムを導入(PDCAの徹底) ◇基本的な人、モノ、資金は、府・市・経済界が支援
行政・経済界の 関わり方	<p>◀行政▶ 水と光のまちづくり支援本部(水都大阪オーソリティ)を設置(H25) ⇒ 水辺空間の活用に関する行政の一元的な窓口(府市合同の事務局)</p> <p>◀経済界▶ 水都大阪パートナーズに対し人的・物的支援を展開(H25実績 2人配置)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ◇水と光に関わる民間活動を府・市・経済界が強力に支援

大阪府大阪市 (道頓堀川)

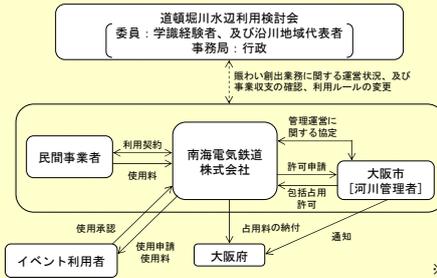
2

●空間構成 (断面構成)

- ・施設設置場所：河川区域
- ・施設内容：棧橋



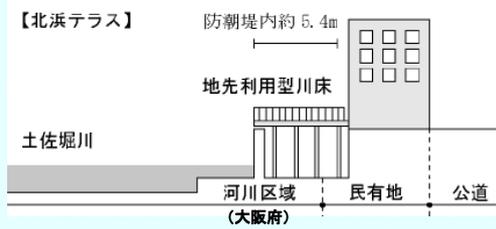
●事業スキーム



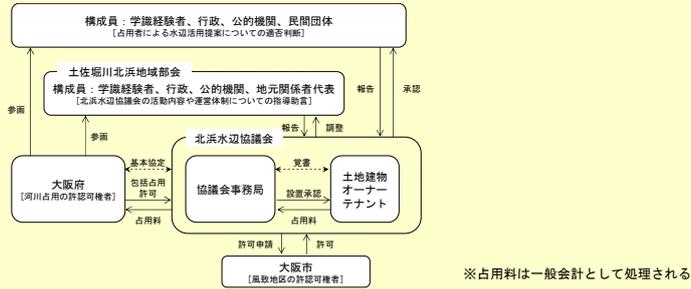
大阪府大阪市（土佐堀川）

●空間構成（断面構成）

- ・施設設置場所：河川区域
- ・施設内容：川床



●事業スキーム



大阪府大阪市（道頓堀川）

～鉄道事業者による包括占用～



大阪府大阪市（土佐堀川） ～協議会による包括占用～

5

北浜テラス設置の歩み

- 2008.10 川床社会実験実施（1ヶ月）2000人以上の来客
- 2009.1 河川敷地占用許可準則の特例措置 改正
（占用施設に「川床」等を追加）
- 2009.5 川床社会実験実施（3ヶ月）
- 2009.7 北浜水辺協議会設立
- 2009.11 北浜水辺協議会が河川敷の包括的占有者に認可される
（民間の任意団体として全国初）
常設型川床として3店舗開業
- 2013.4 川床9店舗



水辺から「まち」が、「日本」が変わる！
ー水辺とまちの未来創造メッセージー
(イメージ案)

平成 26 年〇月

水辺とまちのソーシャルデザイン懇談会

目 次

序 論

I. 水辺とまちの未来創造メッセージ

1. 水辺ってなんだ？
 - (1) 日本の水辺は元々世界に誇れるものであったはず
 - (2) 水辺のリノベーション。経済活動の価値化
 - (3) 水辺のコーディネーター
2. シビックプライドを再生して水辺を使いこなす！
 - (1) 「気づき」の視点。地域ブランドの出発
 - (2) リノベーションの推進によりクリエイティブな空間に
 - (3) 作法（＝ルール）は自分たちの責任で
 - (4) 水辺を賢く使う。新しい発見行為
3. 住民、企業、行政をつなぐコーディネーターが必要だ！
 - (1) 河川管理者もプレイヤーの一人
 - (2) 思いを訴えるだけではなく、隣の人との協力が必要
 - (3) 住民・民間と行政のお見合い
4. ソーシャルデザインの時代がやってきた！
 - (1) 「育てる」時代がやってきた
 - (2) 多様で創造性に溢れた仲間と共通の目標で緩やかにつながる
 - (3) 持続可能性。民間とのwin-winの関係。ファンドレイジング
 - (4) ミズベリングプロジェクト
 - (5) 世界に向けたプロモーション

II. 水辺に寄せる思い【各コメンテーターより寄稿 一人1～2頁(パブリック)】

- (1) 陣内 秀信 (2) 井出 玄一 (3) 伊藤 香織 (4) 金井 司
- (5) 岸井 隆幸 (6) 忽那 裕樹 (7) 久米 信行 (8) 紫牟田伸子
- (9) 田中 義宏 (10) 辻田 昌弘 (11) 遠山 正道 (12) 中島 高志

■コラム

- ・東京と大阪の水辺の歴史 ・世界の水辺 ・江戸、東京の水運 ・水辺自慢写真集
- ・河川敷地占用許可準則 ・総合設計制度 ・etc.

序 論

水辺とまちのソーシャルデザイン懇談会

I. 水辺とまちの未来創造メッセージ

(骨子案) を資料2-2に示す

■コラム

- ・東京と大阪の水辺の歴史
- ・世界の水辺
- ・江戸、東京の水運
- ・水辺自慢写真集
- ・河川敷地占用許可準則
- ・総合設計制度
- ・etc.

水辺とまちの未来創造メッセージ（骨子案）

1. 水辺ってなんだ？

(1) 日本の水辺は元々世界に誇れるものであったはず

- かつて水辺は、歴史や文化、経済、情報の発信の場であり、まちの中で猥雑さや色気を備えた賑わい空間を形成。自由度が高く、シビックプライドが存在。地域ブランド力があった。
- 水害に対して脆弱な国土であるという宿命。戦災のがれき処理等により都心における水辺空間が消失。高度経済成長期を経て、水質の悪化、親水性の消失とともに、都市域の拡張が進み、水辺は機能と効率のみを求める時代の価値観の犠牲に。
- 日本の水辺は歴史・文化が詰まっており、自然も多様。地域ごとに特色があり、世界に誇れるものであるはず。
- かつてあったシビックプライドを現代版としてよみがえらせる。

(2) 水辺のリノベーション。経済活動の価値化

- かつては、舟運、観光資源、商取引の場であり、様々な経済活動が行われてた。水辺は、経済、政治、文化など多様な情報が集まり発信する場であった。
- 海外では、水辺にアーティスト、クリエイターに加え、先を見るビジョンを持っている企業などが集まり、経済活動とクリエイティブ性・アート性が一体となった空間を形成。
- 日本の水辺でも、既存の倉庫、造船場などの産業遺産を美術館やレストランに活用する事例。
- 地域固有の歴史・文化(日本らしさ)を活かしつつ、クリエイティブ性やアート性を備えた新たな情報発信地として再生(水辺のリノベーション)し、ブランド化。

(3) 水辺のコーディネーター

- かつては、地元有力者やテキ屋が、水辺に関わる様々な利害の対立を水面下で調整する役割を担っていたことにより地域の秩序が維持。そこにこそ猥雑さや色気があった。
- 一方、現在では、河川法が利害調整の一部を担うようになったことなどにより、水辺の利用者と河川管理者の間でギャップが発生。
- 一定の作法(=ルール)を確立した上で自由利用を確保するため、利用者と行政の隙間を通訳する「水辺のコーディネーター」が必要。

2. シビックプライドを再生して水辺を使いこなす！

(1) 「気づき」の視点。地域ブランドの出発

- ・近年、水辺の利用形態が多様化し、様々な工夫・取組が拡大。また、水辺を利用したビジネスも始動。
- ・地域の財産・宝石は何か？「気づき」の視点が大切。それを地域特性に応じて磨き上げることで地域ブランドが形成。
- ・そのためには、水辺は自由度が高い場所であることを知ることが重要。

(2) リノベーションの推進によりクリエイティブな空間に

- ・水辺のリノベーションは大規模な商業施設やマンションなどをデザインすることだけではない。
- ・既存の建物の方が、新しい建物よりも広々としており、クリエイティブな利用が可能。また、経済的に優位。
- ・都市の国際競争力を高めるのは、水辺におけるクリエイティブ性やアート性。

(3) 作法（＝ルール）は自分たちの責任で

- ・我が国では、法に守られているという意識が強く、自分たちで個別にルールをつくって実行する機会が少ない。そのため、色気も猥雑さもない。
- ・自己責任の文化が確立すると、公共空間のあり方（施設のつくり方、使い方の自由度など）が変わる。
- ・自分の手で「住んでみたい」と思えるまちにする。公共空間で都市に「受け入れられている」という実感が重要。

(4) 水辺を賢く使う。新しい発見行為

- ・水辺にはワクワク感があり、発見行為がある。使い倒して、楽しみ倒す。
- ・ホンモノで試してみよう。そして考えてみよう。新しい水上経験。「とんでもないこと」と思って尻込みしたら何も進まない。「水辺は自由に利用できないはず」という固定観念の払拭。

3. 住民、企業、行政をつなぐコーディネーターが必要だ！

(1) 河川管理者もプレーヤーの一人

- 作法(=ルール)の浸透度合いや社会的モラルの成熟度等によっては、河川管理者は自由度に対する許容レベルを下げる事が可能となるはず。
- 新たなものを前向きに支援する度量や、受け入れやすさを確保するための窓口の設置などが必要。
- プレーヤーの一人として、地域ブランドを育てていくことも重要な役割。加えて、河川に関する多様な情報を持っており、水辺のリノベーションには欠かせない存在。

(2) 思いを訴えるだけでなく、隣の人との協力が必要

- 単独で考えていても、利害の対立する人とのつながりがなければ、いいものも進まない。
- 利用者の「なぜダメなのか」という思い(利用の目的)と、行政の「事故が起きたらどうするのか」、「この人だけに許可してもよいのか」という思い(管理の目的)のコンフリクト。

(3) 住民・民間と行政のお見合い

- 利用者と行政の隙間を通訳する「水辺のコーディネーター」が必要。
- 利用する側と管理する側のギャップを埋めるためには、両者の間にフックションを置く工夫が重要。包括的に占有する民間が入ることも一つの手。

4. ソーシャルデザインの時代がやってきた！

(1) 「育てる」時代がやってきた

- ・エリアマネジメントの推進。地元住民、利用者、企業、河川管理者など地域全体で、その水辺をどうしていくのかのビジョン・コンセプトを共有。
- ・行政任せにするのではなく、みんながプレーヤー。

(2) 多様で創造性に溢れた仲間と共通の目標で緩やかにつながる

- ・「とんでもないこと」に挑戦するための仲間と、可能性について語ってみよう。
- ・ノウハウ、知識、実績の共有。成功事例も失敗事例も次につなげることが大切。

(3) 持続可能性。民間とのwin-winの関係。ファンドレイジング

- ・民間企業が参入し、ビジネスモデルを構築することにより、持続可能な仕組みが成立。そのために必要となる規制緩和とは・・・
- ・お金を使わないでファンドレイジングしながら面白いことをやっていくためには・・・

(4) ミズベリングプロジェクト

- ・水辺の未来を造る人が集い、共に動き出す。市民・企業・行政の三位一体。
- ・我が国のまちをもっと輝かせるために、「かたる」「つなぐ」「ためす」「つくる」「そだてる」。

(5) 世界に向けたプロモーション

- ・都市の国際競争力を高めるのは、水辺におけるクリエイティブ性やアート性。
- ・日本ブランドの発信。

スケジュール(案)

第1回懇談会 = 12月27日(金)13:00~15:00

- ①趣旨説明
- ②自己紹介

第2回懇談会 = 1月16日(木)10:00~12:00

- ①事例紹介
- ②議論のポイント(たたき台)に関する意見交換

第3回懇談会 = 2月7日(金)13:00~15:00

- ①事例紹介
- ②メッセージ集(骨子案)に関する意見交換

第4回懇談会 = 2月27日(木)13:00~15:00

- ①コメンテーターからメッセージ
- ②メッセージ集(案)に関する意見交換

第 1 回水辺とまちのソーシャルデザイン懇談会 議事概要

1. 日時：平成 25 年 12 月 27 日（金）13:00～15:00
2. 場所：災害対策支援船「あらかわ号」
3. 出席者：別紙
4. 議事の内容
 - (1) 船上視察
 - ① 河川環境課長挨拶
 - ② 二天門船着場から浜離宮まで隅田川を船上視察
 - (2) 趣旨説明
 - ・事務局より懇談会の趣旨説明を行うとともに「水辺とまちの未来創造プロジェクト」の各取組みについて説明。
 - (3) コメンテーター自己紹介

○○：これまで東京の川を見てきた。品川・芝浦は土地利用が変化しているが、隅田川・神田川は意外に時がとまっている状態。イベントや舟運などソフト面はよくなってきたが、事業部門はあまり参加していない。また、問題は民間企業が参加しなかったことで、これは大阪と異なる。川とまちを結びつけるというコンセプトは重要である。大阪の水辺には色気がある。

○○：都市の水辺、都市の水辺に新しい水上経験をつくる、ということに着目して活動している。元々個人的に水辺や船に興味があるところから始まっているが、個人の楽しみと行政の管理にコンフリクトがあると考え。東京の都心の水辺は世界で最も面白い場所で、ポテンシャルが高いと考える。

○○：シビックプライド研究会や東京ピクニッククラブなどで、ウォーターフロントの陸側で活動をしている。公共空間やそこでの出来事のデザインは、都市に受け入れられていると感じられるかどうかを大きく左右する。公共空間を手がかりにまちに関わることができれば、まちに対する誇りが醸成される。都市のウェルカム感の表現も大事だろう。公共空間のような「みんなのもの」は、「自分のもの」でないと捉えられ、結局「誰のものでもなく」なりがち。しかし、ユーザの手に

公共空間を取り戻したい。大阪では使いながら水辺を変えつつあり、少々うらやましく感じる。東京の公共空間を水辺から変えていくきっかけになれば嬉しい。

- 〇〇：一般的に事業が投融資の対象になるにはキャッシュフローが確保されているかどうかポイント。再生可能エネルギーの全量買い取り制度が導入され、誰も見向きもしなかった土地ほどメガソーラーの立地に適しているため突然キャッシュフローを生み出すようになったように、打つ政策次第では無から有が生まれることもある。既存の建築物が立ち並ぶ都市の水辺の再構築には、キャッシュフローを向上させるためのリノベーションがポイントになると思うが、不動産と金融と言う視点からアイデアも出していきたい。
- 〇〇：行政内では、一方でやれそうな流れになっても、もう一方で反対されて実現しないことがよくある。熊本でうまくいった事例があるが、河川、道路、再開発、全て同じ事務所から発注されるというのが大事。また、中央と現場との感覚にずれがあるので、そこを乗り越えてほしい。
- 〇〇：まちを使いこなして楽しみ方を共有すること、その舞台となる環境の形成、そして、それを支える仕組みづくりが必要である。また、そのプロセスに関われることが、まちに誇りを持つことに重要な視点である。水都大阪では民間の提案から実現に結びつけていくという流れを今年から作っている。また、「川を表側にしていく」「水辺からまち全体を使いこなす」「各種事業を協働する」「活動を支えるサポーターの教育を行う」「イベントから日常に広めていく」「府、市、民間、ひとつになってやっていく」「水辺に接した空いている土地を最大限利用する」などの考えで提案をしている。
- 〇〇：川は右岸左岸や橋の東西で違う文化をつくっているのが面白い。お金を使わないでどうやってファンドレイジングしながら面白い事をやるかに関心を持っている。四万十川の砂浜美術館を参考に隅田川河口でやりたいと考えている。ファミリーがくるような仕組みづくりが重要。自転車で川を走るときに、行きか帰りのどちらかを船で運んでくれるようになると利用が高まると思う。川から生活が見えるようになると面白い。川沿いに（生活に密着した）マーケットができないかと考える。日本財団 CANPAN (NPO の情報ネットワーク) の理事などもやっており、様々な橋渡しをする役割と考えている。
- 〇〇：企業や地域のモノづくり、誇りをどのように作っていくか、ということに関わってきたが、まちづくりの活動も広がってきた。デザインを受け取る側がいつ、どのように、どうやって受け取るかが重要と考える。いかにまちづくりの計画を地域に伝えていくか。日々目にしているものと記憶とをどのようにつなげてアプロ

一チしていくかに興味がある。隅田川は色々なバリエーションを楽しめる川なので、それをつなぎながらどうやって伝えていくか楽しみに思っている。また、人に伝えるときにモデル事業がすごく重要。

- 〇〇：水都大阪系の仕事をしている。道頓堀に長く携わっており、「新しいこと、とんでもないことをやりたい」という想いはある。場所により分けて考える必要があると考えており、都市では、民間参入と持続可能な仕組みづくりが必要と考える。色々な取組みを行おうとすると役所的にはどこが何を負担するかなどで問題になることもある。
- 〇〇：諸外国だと船が通勤手段など日常生活にとけ込んでいる。また、オリンピックは海辺に施設があり、地下鉄の延伸や橋を架けるなどの話もありお金や時間もかかると考えられるが、それらと並行して、水運に光を当てて考える必要があるという問題意識を持っている。
- 〇〇：河川は安全第一が使命であるが、貴重なオープンスペースでありうまく活用していきたい。日常的空間と非日常的空間の2つの側面があり、利用方法が異なる。前者は居住者の散策など。後者はスカイツリー周りなど外からの人にどのようにアピールするかなどが重要になると考える。二天門のオープンカフェの取組みもその一環として実施した。

(4) その他

- ・事務局より今後の予定について説明するとともに議論のポイント案について示し、次回の議論にしたい旨の説明。

第1回 水辺とまちのソーシャルデザイン懇談会 出席者

(敬称略・50音順)

	氏名	所属	出欠
コメンテーター	井出 玄一	一般社団法人ポート・ピープル・アソシエーション代表理事	○
コメンテーター	伊藤 香織	東京理科大学工学部建築学科准教授	○
コメンテーター	金井 司	三井住友信託銀行株式会社理事・CSR担当部長	○
コメンテーター	岸井 隆幸	日本大学工学部土木工学科教授	○
コメンテーター	忽那 裕樹	株式会社E-design 代表取締役	○
コメンテーター	久米 信行	久米繊維工業株式会社取締役会長	○
コメンテーター	紫牟田伸子	紫牟田伸子事務所代表	○
コメンテーター (座長)	陣内 秀信	法政大学デザイン工学部建築学科教授	○
コメンテーター	藁田 博行 (代理)	大阪府都市整備部河川室河川環境課長	○
コメンテーター	辻田 昌弘	三井不動産株式会社S & E 総合研究所長	○
コメンテーター	遠山 正道	株式会社スマイルズ代表取締役社長	×
コメンテーター	中島 高志	東京都建設局河川部長	○
アドバイザー	渥美 雅裕	国土交通省水管理・国土保全局河川環境課課長	○
アドバイザー	藤井 政人	国土交通省水管理・国土保全局河川環境課河川環境保全調整官	○

第 2 回水辺とまちのソーシャルデザイン懇談会 議事概要

1. 日時：平成 26 年 1 月 16 日（木）10:00～12:00
2. 場所：公益財団法人リバーフロント研究所 AB 会議室
3. 出席者：別紙
4. 議事の内容

(1) 第 1 回懇談会の議事概要について

- ・事務局より、第 1 回懇談会の議事概要について説明を行った。

(2) 事例紹介

- ・3 名のコメンテーターより、これまでの活動状況や課題について事例紹介を行った。

- ：・隅田川の e ボートの写真。都市で働くサラリーマン、OL がアフターファイブに水に出て楽しめる方法はどういうものかと考えて行った取組。船で気分的に盛り上がっているのがわかる、ものすごく気に入っている写真。
- ・都市の水面を楽しみ方をもっと掘り起こして、使い倒して、楽しみ倒して、都市で生活している者が豊かな生活ができるようにしたいと考えている。都市に新しい水上経験をつくるということをモットーに活動している。
 - ・本日は、活動紹介、水辺の現状と課題、水辺とは、船とは、パブリックスペース、クリエイティビティ、プリンシパルの確認、という話をする。水辺というパブリックスペースの使い方は重要。創造性と水辺の関係もこれから大事になると考える。
 - ・最初の活動は運河に浮かぶ水上ラウンジを設置した。
 - ・また、水辺のマップを作成している。当時は水辺にフォーカスしたマップは無く、陸か海かどちらかで、その中間地帯をとにかく歩き回って調べて、作成した。場所としては京浜運河で、ここは東京の宝の一つではないか。20 世紀はまさに世界の工場。歴史的な産業遺産でもあり、人の暮らしもすぐ背後にあるような面白い場所。
 - ・これは横浜トリエンナーレの作品として、バージ船を改装したもの。おもしろいのは、アートというと結構何でもできるということ。普通では実行ないようなことも出来る。
 - ・これは人が船から陸に上がる瞬間を捉えた写真。陸にあがってほっとする瞬間も船の良さだと思う。
 - ・これは災害対策支援船ということで国土交通省の支援を受けて実現したプロジェクト。災害時の支援の場を水辺に設けるということで、屋根に太陽光パネルを設置し、天ぷら油の発電装置をつけたりした。アートということで、船内で展示会も実施した。
 - ・また、栈橋をつくるプロジェクトも実施している。栈橋を新設するのは大変で、川の流れ

- を遮らないようにする方法などで苦労した。
- これは浜離宮の裏を探索するクルーズで、大変面白い場所だが、立ち入り禁止になってしまった。
 - 首都高の入り組んでいる姿も活動するうちに愛着がわいてきた。雨の日もクルージングができる。このような水辺も東京の水辺の一つの魅力。外してもらっても構わないが。
 - これは横浜駅を出たすぐで、電車が水面のすぐ近くを通っている。なぜかわからないが、低い橋をくぐると人は妙に盛り上がる。
 - BO 菜というイベントも実施している。
 - SUP は新しい道具で、我々が今一番盛り上がっている活動。横浜の大岡川。すごくハードルが低く、誰でもすぐに乗れる。ボートなどと異なり、船好き、海好き、川好きでない一般の人が活動を始めているため、すごくポテンシャルがあると思っている。
 - 黄金町で棧橋を貸していただき、ボートピープルが管理運営も手伝いながら活動している。ここで、今までは水面だけで活動していたが、町の人たちと一緒に活動をしていく、まさにまちと水辺が繋がった場所で活動が広がっていくという体験をした。
 - 現状と課題。たぶん東京の水辺が世界で一番自由度が低い。水辺は基本的には港とか工業で使っている場所が多いので自由度が低いのは確か。ロンドンもニューヨークも変わりはない。ただ東京の場合はそれが顕著で結果的に訪れる人が少ない。遊歩道とかを作っても人がいない。
 - 水辺とクリエイティブ性というのはすごく重要だと思うが、クリエイティブ感が東京では全然起こっていない。海外ではアーティストとかクリエイターとか、もしくはちょっと先をみるビジョンを持っているような企業が水辺にどんどん集まるような動きになっているが、東京はそれがまだ全く起こっていない。
 - また、水辺が分断されている。よく言われる縦割り行政であり、水辺では顕著。
 - 水面は基本的にはパブリックスペースのはずだが、「パブリック」と言った瞬間に、逆に使いにくくなっている。利用者の空間になっていない。業界であるとか既得権者のものになっている。それから広くて浅い不特定多数の声、例えば、水辺でイベントやりたいと言っても、横にあるマンションのたった一人の方が NO と言うとできないということが、あらゆるところで起こっている。ここがすごく課題だと感じている。
 - 船には移動手段という以上に別の機能がある考えている。一つは人と人をつなげるコミュニケーションツール。第 1 回の懇談会でも会議終わった後の雑談、議論のライブ感、盛り上りはすごくよかった。また、ミシェル・フーコーはヘトロピアという日常の延長線上にあるが、日常から切り離された理想郷の例として、博物館などと共に「船」を挙げている。
 - いま都市の国際競争力を決めるのはクリエイティブ性、もっといえばアートの考え方。テムズ川では、アーティストが棧橋を自分たちで造って、暮らしをしている。すごく重要と考える。
 - プリンシパルの確認。①水辺幸福追求権。全ての人は水辺で幸せになってしまう権利が元々ある。②自己責任の原則。水辺では自分の身は自分で守る。他の人に責任を被せるということはない。③航行の自由の原則。浜離宮の裏の水面も、本来はパブリックスペースだ

から誰でも通れる権利があると思いたい。④水辺自由使用の原則。水辺という広いエリアもパブリックスペースと考えれば、誰もが使えるようなものにしていきたい。

- 〇〇：・日本の歴史を考えてみると水辺は一番自由度があった。
- ・盛り場も芝居も怪しげなこともクリエイティブなことはみんな水辺から生まれた。京都も隅田川も金沢も。それが近代に治水が重視され、舟運がなくなり、人の手から水辺が離れてしまった。それで管理する対象になったので自由度が下がった。今またルールを作りながら自由度の高い空間にしていくということ。
 - ・ニューヨークでは水際の大きな倉庫アーティスト達に移り、今はそこが産業、経済、文化の発信地になっている。
- 〇〇：・私たちは都市を選んで住むという自由を手に入れ、土地に縛られるということが段々無くなっている。都市間の移動が激しいヨーロッパでは町に愛着を持たずに住み続けていくという人が非常に多くなってきている。
- ・その中で、都市再生の時に、ハードだけではなく、そこに住む誇りや意味を人々が得るためにどのような方策をするのかということが問題になり、ハード整備とソフト整備が共に行なわれるようになってきている。それを 2008 年に本にまとめた。
 - ・EU の背景。都市間競争が増え、産業構造の変化から都市再生をしないと都市が立ち行かない。ハード面のみではなく、ハード面とソフト面が一緒にならないと産業構造だけではなく都市構造自体の変化についていけないのではないかと、というところから、「都市再生」「未来のビジョン」を人に届ける戦略、を主に取り始めているというのが大きな側面。
 - ・都市が人とコミュニケーションをする必要がある。町の中にコミュニケーションツールというのはものすごく沢山あるが、本当にコミュニケーションツールとしてデザインされているのかというのが我々の大きな問題提起。
 - ・まちというものを頭で理解したり、共感したり、体験したり、アイデンティティを感じたりということ、まちの中の様々なポイントから感じているはず。
 - ・シビックプライドはまちづくりを通じて、人々の心の中に生まれなければいけないものであり、政策ではない、ということをしてイギリスのミリバンドは言っている。
 - ・それぞれのまちがそれぞれの地域性を活かして、うまく組み合わせることでそのまちならではのアイデンティティ、体験、共感というものを作りあげている。
 - ・水辺も町のひとつ。例えばハーフェンシティはエルベ川沿いの旧関税都市だが、今まで誰もはいらなかったことをまちに開く、というプログラムを行っている。ドイツは工事現場を見せる。よく行われている。工事現場を見ることができ仮設の塔や工事現場を見するためのクルーズを行っている。水辺とまちの関係を如何に作っていくのかということ、土木工事をする間から人々に届けようとしている。水辺の広場というものをどういうふうにしていくのが計画に入っているが、建築よりも広場を先に造って、建築をしている隣のところで、人々がすでにワークショップやイベントをしている。テラスで人々が工事現場のまちを眺めるということが行われている。

- ・イギリスのニューキャッスル市とゲイツヘッド市。創造都市としても有名。つり橋の美しい動きを見るために両岸に見る場所が発達。ニューキャッスル側にはカフェがあって、ゲイツヘッド側は小麦の倉庫を利用した美術館が造られていて、その手前が広場になっていて人が集まっている。橋を架けることによってニューキャッスル・ゲイツヘッドという新しい芸術文化圏、都市文化のエリアを作っている。
- ・ボルドーはガロンヌ川の川沿いの整備を沢山している。川の左右岸を西側が文化的、東側が自然というように、同じ様に整備するのではなく、区別をしながら楽しみ方が違う。両岸の風景が違うが、相互にイメージを交換するようになってきており、面白い風景を作っている。
- ・世界の都市は水辺をまちの中心として捉えているところが非常に多い。水辺とまちというものを如何に繋げていくのかということがアイデア、デザインで作り上げられている。トラムや自転車、船などのように連続性として作られている。
- ・水辺の産業遺産を活かすという視点。産業遺産の大きな倉庫や造船所などに徐々にアクセスできるようかたちを取っている。造船所の近くに何かできるような広場があったり、倉庫や造船所が、美術館やレストランになっていたりしている。
- ・パブリックスペースというものが誰のものでもなくなってしまうのが課題。ヨーロッパでは市民のものとしての公共の整備が非常に大きくなっている。それと同時に市民が自分たち事として公共を楽しむ作法がデリバリーされている。この二つが無いと公共をただ開いているだけで、どんどん商業ベースになってしまって、どんどん汚くなっていく。
- ・まちの様々なベーシックな部分を整備するにあたって、どの様に人をまちに引き込むのかということのをうまくモデル化していくことによって、使い方の作法というものを知らせることでまちと人がコミュニケーションをとっている。
- ・作法をデリバリーする、コミュニケーションをつくっていくということが、これからの公共土木、建築、そしてそこにソフトが入ってくるときに非常に重要。
- ・ピクニックの紹介。水辺でピクニックをすると、ものすごく開放感がある。ピクニックというのは（まちや水辺と人々が近づくのに）非常にいいツール。シンガポールのライトアップされた水辺のナイトピクニックの紹介。
- ・水辺をどう活用するかというアイデアはたくさんあるが、その楽しみ方の作法、ルールを以下にコミュニケーションするかが大事。

- ：・誰のものでもなくなる、というのが先ほどの自由度がない、と対になった指摘で面白い。
- ・EUでは統合がどんどん進み、国境がなくなり、都市間競争で都市が活性化している。
 - ・水辺に多い産業遺産などが先端的・創造的な役割をしている。
 - ・誰のものでもなくなった公共空間をピクニックで取り戻すという活動も非常に興味深い。

- ：・東京都で進めている河川の賑わいづくりの取組や課題について、低地帯の河川づくりの歴史的経緯も交えて説明する。
- ・江戸時代から治水対策は進められてきた。徳川の時代に利根川の東遷なども行われた。近

代に入っても水害との戦いは東京の課題であり、明治43年の台風では区部の1/3ほどが浸水した。それに対応して荒川放水路などをつくり、いかに早く海まで水を流すかという取組がなされた。一方で都市化、工業化により、地盤沈下という別の課題も出てきた。結果的に、区部の2割がゼロメートル地帯となった。

- ・対応策として、スーパー堤防の取組がなされた。大川端地区は倉庫や工場だったものが都市化の進展で機能転換されるときに、開発と併せて水辺がスーパー堤防化された事例である。白髭西地区は、工場や木造密集地域だったところを都の再開発事業と併せて、水辺の空間づくりをした事例である。このような空間も開発と併せれば可能。
- ・また、堤防全面の地盤改良などの際に、地域の特徴に併せたテラスを整備した。
- ・地盤の低い地域では、人工的に水位を低下させ、地域の治水安全度を高め、生まれた空間に緑化や緩傾斜堤防をつくった。旧中川や小名木川の事例がある。また、北十間川について東京スカイツリー開発に併せ、人が歩ける空間とした。
- ・このようにせっかく作った人が歩ける空間をどうやって利用するかという取組も最近始まり、川沿いでのオープンカフェ、大道芸、キッチンカー、東京ホテルなどの取組も行われている。
- ・また、神田川でJRと協議して歩ける空間をつくり、日本橋でも船着場を整備した。
- ・これからの課題をいくつか挙げる。堤防裏の管理用通路部分に張り出したテラス作りなどにも取り組んでいる。東横線の地下化に伴い高架の線路が不要になるため、渋谷川周辺の開発についても東急などと協議を進めている。合流部で途切れる川沿いの歩行空間をつなげる方法、川沿いの敷地幅が狭い空間のスーパー堤防化方策、夜間の照明なども課題と考えている。
- ・2020年のオリンピックに向けて、河川も景観や賑わい、舟運などに着目して取り組んでいきたい。
- ・隅田川でアクセス性や開発の可能性などポテンシャルの高い地域について、メリハリをつけて色々な取組を行う考えを持っている。

- 〇〇：・基本的に日本は洪水から守るというのは絶対的な命題だが、守りながら、だけど活用できる形式というのを増やしてきて、スーパー堤防や水位低下の河川などの例がある。
- ・目黒川などはかつては洪水の常襲地域だったが、地下に遊水池をつくり安全度があがることにより、今は住みたい街の上位になるという、逆転現象も起きている。

(3) 意見交換

事務局：資料3「議論のたたき台」の説明

- 〇〇：・資料3は、前回の議論だけの内容である。今回、既に3名の方から非常に重要な問題提起を頂いたので、それも合わせて再編成する必要がある。
- ・例えば、「公共空間なのに自由に使えない、使わない。みんなの気持ちや体質がそうになってしまっている。それを取り戻す知恵と方法が必要」、「クリエイティビティをどうやって水

辺に持ち込むのか」、「ハードをもっとソフトと一緒に考える」など。

- ・たたき台は、資料3の様に多くの項目を並べるよりも、本質的なこと、原理的なことを言う必要がある。
- ・資料3にある視点は枠組みであって、目指すべき方向性ではない。
- ・細かいことを並べても、従来言われていることを越えることは難しい。

〇〇：・浮世絵などを見ると、江戸の水辺は色々な特色があった様だが、川によって固有のブランドがあるのではないのか？東京の川は運河のようになってしまったのか？

- ・地域植生を活かすなどの生態系への配慮も必要だと考える。人が中心の議論になっているが、環境の視点も重要。
- ・行政や NPO はすでに様々な取り組みを行っており、手段はある。あとは組み合わせの問題だと思う。
- ・エリア毎に街づくりの目指すべき方向性が決まっていた方がよい。
- ・3.11以降、水辺が危ないという風潮があり敬遠されがちのため、その対策が必要だ。
- ・東京の川は両岸に建物が立ち並んでおり、大規模な再開発は現実的ではない。既存の建物を活かしたリニューアル、リノベーションが現実的で、その場合の担い手はデベロッパーではない。費用については、補助金もあるが官民ファンドのようなもので、民間資金を誘因する工夫も必要。

〇〇：・クリエイティブな使い方を考えると、新しい建物よりも、広々している既存の倉庫の方が適しているという面がある。経済的にもその方が良いという面もある。

- ・永井荷風が『日和下駄』のなかで、東京の水辺のタイプを巧みに分類している。東京の水辺はバラエティに飛んでいる筈だ。
- ・ドイツのハーフェンシティは水に浸っても良い構造になっている。

〇〇：・まずは、今ある環境がどれだけ価値があるのかを使って体感するきっかけづくりが重要であり、少人数、小さな団体が行動を起こせるしくみが必要。

- ・その関係者をつなぎとめる運用制度を再構築するという手順で取りくむべきである。水都大阪では、これを支えるパートナーズという民間組織を立ち上げている。
- ・水辺は、都市の中で自然の要素が最もある場所だ。それだけ地域ごとの個性や魅力のベースとなる場所が数多くあるので、周辺の地域と共に考えると効果がある。
- ・その分危険な要素もあるが、非常に楽しいところでもあり、こういった裏腹な場所が少なくなりすぎた。自己責任で使いこなすことを応援する必要がある。
- ・水辺では発見行為ができる。この発見するものは各地域で異なるものだが、その想いが実感としてデリバリーされる感覚や仕組みが大切で、日本では自分達のまちで独自にルールを作って執行するということが少なすぎる。
- ・地域独自のルールを生み出し行動を起こすことが重要だ。
- ・この会議も前はすごく面白かった。次回以降は水辺でやるとか、公開して、「あんなこと

を真剣に話している奴らがいるんだ」ということを見せるべきだ。

- ・ひとつのきっかけがあれば、多くのクリエイティブな人達が関係を持てる。
- ・色々な人達が出会うことが大切である。それが水辺とその周辺の地域と連動して、その仕組みづくりができるとうい。
- ・時代も変わって来たので、行政管理にまかせっきりで陳情ばかりしている状況を変えて、自己責任を持つという前提にすると、河川の断面も、手すりのあり方も変わる必要があるということ、市民や民間側からも提案しなければならない。
- ・河川管理者もこれまでの取り組みや仕事の誇りをキッチリと伝える必要がある。その上で、絶対に譲れないところと、創造力があれば自由度があるところを分けて管理することが大切。一律の管理方法では、水辺ににぎわいは生まれない。
- ・そのハードルを越えるところにクリエイティビティが必要で、責任ある市民性も求められる。機会の平等を前提にした新しい公共のあり方を考えるべき。
- ・水辺周辺の公園やオープンスペースの開発にもインセンティブを与えることが重要。

- ：・土木構造物、人間と水との付き合いの空間をみんなが理解し、水害の怖さと水辺の利用の両方をしっかり考える必要がある。
- ・カミソリ堤防ができたことで安全神話となってしまう、江東の人達が水害のことをあまり考えなくなってしまうことがある。
 - ・水辺はワクワク感があり、発見がある。全てのところが管理され、商業施設ばかりになってしまえば、うまくいかない。

- ：・水辺の活動のプロモーションも重要になってくる。わかりやすい対決、例えば「規制緩和対決！」という様なことをやると、全国の水辺のあり方も紹介できるし、しくみづくりや行動のきっかけも生み出せる。シナリオのないドラマ的なもので面白いものになり、注目されるのではないか。

- ：・今までは、「恐怖を伝達する」ことをやっている。それでは面白くない。
- ・「ハプニングの伝達」でなければ。

- ：・個人の視点が大事であって、河川管理者総体ではなく、担当者個人の視点が大切。それは、先程お話しがあったクリエイティビティにもつながる。
- ・また、川のブランドとも関係している。これからの時代に、川を全体として捉えてブランディングするということは考えにくい。
 - ・それよりも、「その川にこの人がいて」、「こういう気持ちで活動している」ということに光が当たっていけばと思う。
 - ・その時に、伝えるのが下手だということがあるので、メディアや橋渡しをしてくれる人の役割が出てくる。

- 〇〇：・「カミツリ堤防にこんな意味がある」、「スーパー堤防はこういうものだ」、「ポンプ止めたら大変だ!」とか話すと、すごくウケる。こういった目に見えないことは、産業遺産だけではなく“文化”だ。
- ・東京スカイツリーの話しただけしてもウケない。あの下に、コージェネレーションシステムがあって、出てくるエネルギーの方が大きいんだといったことを話すと、みなさん感動する。
 - ・今までは防御とかネガティブな話しただけだったが、ポジティブに転ずることが大切。
 - ・まちおこしをやっていると、公共予算を使うと思われがちだが、そうばかりではない。
 - ・例えば、今は野沢温泉は外国人スキーヤーで大変な賑わいだ、なぜかという、自由に滑ってよし、そのかわりレスキュー代は自己負担という自己責任の概念をはっきりさせて導入したら、海外から人が殺到した。
 - ・きれいにしすぎるのもダメ。何故野沢温泉かということも、昭和レトロであるという要素がある。「川発で猥雑な街に出て行く」というデザインが重要。
 - ・いいもの作っても人が来ないとダメ。
 - ・そのためには、地元の元気な人と“よそ者、若者、ばか者”が1～2割くらい入る仕組みを川辺で作らないとダメ。
 - ・クリエイティブな人やアートをやっている人には自転車に乗っている人が多い。自転車通勤と川辺を結びつけると良い。
 - ・例えば朝の通勤ではハンケに自転車を載せ、夜はそのハンケを水上舞台として貸し出せば、借りたい人も大勢いるし、面白いことをやっている話題になり、観光名所にもなり得る。経済的に成り立つ。
 - ・墨田区では、通りをガーデニングの場所として使っていて、やっている人も楽しみ、観光客にもウケている。必ずおばあちゃんがいて、「きれいね」と言うとおもてなしをしてくれる。
 - ・川沿いをガーデニングに使えば、喜んで世話してくれる人が大勢いる。散歩する人とのコミュニケーションも生まれ、携わる人の生きがいにもなる。向島百花園の梅屋敷は、この仕組みでできたものだ。

〇〇：・ああいうガーデニングは本当に日本的で良い。

- 〇〇：・利用したい人にとっては、「こんなに良いことをしようとしているのに、何故ダメなの?」という疑問がある。
- ・一方。行政側には、「事件・事故が起きたらどうするの?」、「何故この人だけ許可して良いの?」という懸念が常にある。これを許可しても良いという大義名分が必要。
 - ・この間をつなぐ、通訳というかコーディネータが必要。
 - ・例えば、「アートならOK」という様に、行政目的に合致する場合ならOKということもあり得る。河川行政とは違う行政目的が必要になる。
 - ・大阪の場合には、「水都大阪」再生のために、府市の関係部局による合同事務局としてオー

ソリティを設置したり、民主導の水都事業推進組織としてパートナーズという組織を作ったりした。オーソリティは観光部門と土木部門が一緒になったもので、そこが事務局となって水辺のプレーヤーを誘致するなり、コーディネートしてくれるパートナーを公募した。そこへ忽那さんが手を上げてくれ、今、パートナーとして活動してくれている。

- ・府市の観光部門と土木部門の縦割り行政からオーソリティに対して権限委譲がなされていたり、予算立ても可能となっていたりするかと言われれば、そこはあいまいで不十分などころがある。
- ・そのあいまいさ不十分さが解消されたコーディネータが必要。

〇〇：・東京の場合には、これをやりたいという様な提案はあまり来ていない様に思う。

〇〇：・造った物の維持管理や事件事故の対処などに相当の費用・人員が必要になる。
・ランニングコストや自己責任という使用者責任をも含めた包括的な管理をしてくれる民間が出てくれば、進むと思う。

〇〇：・東京にもやる気がある人はいる。ただし、どこに相談に行ったら良いのかさえわからない状態だ。

〇〇：・活動したい人はいるので、行政の窓口を一元化する必要がある。
・色々な人が水辺を利用したいと思っているため、バラバラに相談に行くのではなく、合わせた形で協議に行ける様にしたい。水都大阪パートナーズのような中間支援も展開する組織を充実させることが可能性を高める。
・その責任を誰が担うのかという問題もあるが、水辺の利活用で利益を生むことができれば、保険の仕組みや一体的なプロモーションも可能になる。水都大阪では、それを牽引する規制緩和を含めた概念やBIDなどのオペレーションを提案している。
・それで一度やってみれば、たとえ失敗したとしても、「俺は絶対成功する」という次の世代が必ず出てくる。失敗ができない雰囲気をつくりだす、行政の補助のあり方などを見直し、チャレンジを応援する制度が必要となる。

〇〇：・道頓堀だけは、公募で選定した南海電鉄が管理者としてやっている。何かやりたい人は南海電鉄に申請している。ただし、儲かるものではない。

〇〇：・江戸の火除け地は、地元の有力者が仕切っていて、適切にお金を取っていて、上手く回っていた。近代それが無くなった。

〇〇：・何故、公共空間を管理する論理になったかという、不法占拠を排除しなければならない背景があった。
・昔は的屋さんがいて仕切っていたが、今はそれを排除したので、新たな組織を作ってそこ

に管理させようとしている。

- ・利用の目的と河川行政の目的が合致するののかという問題がある。
- ・現在の河川行政は狭義であるため、周りのことも一緒になってやり、大きな行政目的を河川行政も担うという土壌を創らないと、管理的な問題は解決しない。
- ・その意味で交流人事が有効。

〇〇：・提案がどこかでおさえられているのかもしれない。

- ・公共空間は限度はあると思うが、誰でも利用できるというのが原則であり、利用したい人と管理者との間でやりとりをする中で、どのような利用なら問題が無いのか収れんしていくものだと思う。

〇〇：・今、「ヤミ市」研究が盛んになっている。日本の都市の原点でもある。

〇〇：・今日も話が出た、利用する側と管理者側のギャップを埋めることができれば解決できると思う。間に、例えば先程の的屋や南海電鉄の様なワンクッション置くことが大切。

- ・役所的に考え、「やるからには、こんな成果が上がらなければならない」と思うと面白いものがない。
- ・お金も付けるけれど、「好きにやって良いよ。ただし、期間限定ね」といったことがあっても良い。永久に残るものを作ろうとするからつまらないものになりがち。
- ・例えば、大金をかけて壁画を作るよりは、ギャラリーとして開放し、次々に替わる方が良い。
- ・参加したい人が参加できる仕組みを作れないか。
- ・経済論理というのは、大企業の経済論理になっている場合が多い。同じことでも中小企業であれば、経済的に成り立つことある。
- ・リノベーションの時代には、小回りがきく方が適合しやすい。
- ・例えば、大規模開発であれば大企業で十分対応可能であるが、“猥雑さ”といった面白味に欠けるものになりがちである。
- ・堤防沿いのビルの2階を改造して川沿いにデッキを張り出す様なものに、小額でも助成する仕組みができれば、面白いものになると思う。
- ・この様な第3の仕組み的なものがないため、せっかくあるリソースが、かみ合っていない。

〇〇：・臨海部は大きな工場や倉庫で占められており、個人や小さい規模の企業が入り込める余地が無い。

- ・やる気があっても、個人ではそういうところには入り込めない。横浜のMM2 1では、既存の倉庫の活用の方に後から流れた。
- ・隅田川沿いなどには、既存の小さい建物がたくさんある。

〇〇：・起業家向けに、「ここを自由に使って」という様なコンテストでもやった方が、良いアイデ

アが出る。

- ・起業家支援も大切である。

〇〇：・企業だけではなく、“地域”も大切である。

- ・企業等からの提案があつて、地元と合意形成する仕組みができると良い。

〇〇：・地域の人が入った会社組織ができ、そこが包括占有をもらってやるという様なことができると良いと思う。

〇〇：・アーティストの力・能力を借りるべきだ。

- ・彼らが水辺に来ると、ものすごい創造力が湧いてくる様だ。この表現力・発信力を活用すべき。たいして予算はかからない。

〇〇：・名古屋の中川運河でも、ニューヨーク帰りの女性が活躍している。

〇〇：・今、廃校がそういう人達の活動拠点になっている。

- ・それを水辺に持ってくるとか、雑居ビルで行うとかやると面白いアイデアが出ると思う。

〇〇：・私達では思い浮かばないようなお話しが聞けた。これがまさに情報発信だと思う。

〇〇：・こんなに盛り上がり、大変楽しい。

- ・これをまとめるのは大変だと思うが、次回、メッセージ集の方針が示される様なので、それを議論しましょう。

(4) その他

- ・〇〇より、ミズベリングの紹介を行った。

- ゆくゆくは行政と市民・民間の中間で色々なことをコーディネートしていくような事務局に育っていく第一歩として取り組んでいる、「ミズベリングプロジェクト」をご紹介する。
- 「ミズベリング」は「水辺」と「輪（リング）」から作った造語。何かをやるときにみんなで共感をもてるような言葉が必要であろうということで考え、近々打ち出していこうとしている。また、「現在進行形」「未来に向かって動いている仕組みが必要」という想いも込められている。
- 行政からではなく、外側の発信力のある方に発信して、行政に打ち返していただくことを考えている。
- 「つなぐ」「かたる」「ためす」「つくる」「そだてる」という想いを込めて実施していくつもりである。
- そのためのツールとして、色々なツールを用意して、アーティストとの輪をつないでいく、などいろんな仕組みを考えている。

- ▶ 正式には今月末に始動する予定である。

- ・事務局より資料4を用いて今後のスケジュールについて説明を行うとともに、最終的なメッセージ集に向けて、今後メッセージの寄稿依頼がある旨の連絡を行った。
- ・〇〇よりミズベリングの情報公開について質問があり、ミズベリングの活動情報の伝達は特に問題ない旨を国土交通省より回答した。

以上

第2回 水辺とまちのソーシャルデザイン懇談会 出席者

(敬称略・50音順)

	氏名	所属	出欠
コメンテーター	井出 玄一	一般社団法人ポート・ピープル・アソシエーション代表理事	○
コメンテーター	伊藤 香織	東京理科大学工学部建築学科准教授	×
コメンテーター	金井 司	三井住友信託銀行株式会社理事・CSR 担当部長	○
コメンテーター	岸井 隆幸	日本大学工学部土木工学科教授	○
コメンテーター	忽那 裕樹	株式会社 E-design 代表取締役	○
コメンテーター	久米 信行	久米繊維工業株式会社取締役会長	○
コメンテーター	紫牟田伸子	紫牟田伸子事務所代表	○
コメンテーター (座長)	陣内 秀信	法政大学デザイン工学部建築学科教授	○
コメンテーター	藁田 博行 (代理)	大阪府都市整備部河川室河川環境課長	○
コメンテーター	辻田 昌弘	三井不動産株式会社 S & E 総合研究所長	○
コメンテーター	遠山 正道	株式会社スマイルズ代表取締役社長	×
コメンテーター	中島 高志	東京都建設局河川部長	○
アドバイザー	渥美 雅裕	国土交通省水管理・国土保全局河川環境課課長	○
アドバイザー	藤井 政人	国土交通省水管理・国土保全局河川環境課河川環境保全調整官	○